

Title	再帰代名詞と先行詞の構造的関係について
Author(s)	轟, 里香
Citation	Osaka Literary Review. 35 p.36-p.48
Issue Date	1997-02-10
oaire:version	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25394">https://doi.org/10.18910/25394</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 再帰代名詞と先行詞の構造的関係について

轟 里 香

## 1. 序

英語の再帰代名詞の先行詞は、一般的に、同一指示関係にある再帰代名詞よりも構造的に高い位置になければならない。次の例が示すとおりである。

- (1) a. Mary<sub>i</sub> killed herself<sub>i</sub>.  
b. \*Herself<sub>i</sub> killed Mary<sub>i</sub>.

再帰代名詞と先行詞の間のこのような関係をとらえるため、Chomsky (1981, 1986b) の束縛原理では、c 統御という概念を採用している。しかし、束縛原理を破っていても文法的な例が見られるため、c 統御概念を用いずに再帰代名詞とその先行詞の関係を規定しようとする試みが行われている。

小論では、c 統御以外の概念によって再帰代名詞と先行詞の構造的関係を規定する試みの幾つかを考察し、比較する。そして、それらの試みのうち、Todoroki (1995) で採用した  $\theta$  役割の階層を使った定義が最も効果的と思われることを指摘する。<sup>1</sup>

## 2. C 統御の問題点

Chomsky (1981, 1986b) によれば、名詞句の分布を規定する束縛原理はつぎのようなものである。

### (2) 束縛原理

- A. 照応形はその最小の完全機能複合(CFC)の中で束縛されなければならない。  
B. 代名詞はその最小のCFCの中で束縛されてはならない。

C. 指示表現は束縛されてはならない。

再帰代名詞は照応形のグループに属するので、その分布は束縛原理の A によって規定されることになる。また束縛という概念は次のように定義される。

- (3)  $\alpha$  が  $\beta$  を  $c$  統御し、 $\alpha$  と  $\beta$  が同一指標を持つときそしてそのときに限り、 $\alpha$  は  $\beta$  を束縛する。

C統御は次のように定義される。<sup>2</sup>

- (4)  $\alpha$  も  $\beta$  もどちらも相手を支配せず、 $\alpha$  を支配する節点のすべてが  $\beta$  をも支配するときそしてその時に限り、 $\alpha$  は  $\beta$  を  $c$  統御する。

以上の定義から明らかなように、束縛原理によれば再帰代名詞が容認されるためには、同一指標を持つ先行詞によって非対称的に  $c$  統御されることが必要条件となる<sup>3</sup>。このことは、(5) に関して当てはまる。

- (5) (= (1))  
 a. Mary<sub>i</sub> killed herself<sub>i</sub>.  
 b. \*Herself<sub>i</sub> killed Mary<sub>i</sub>.

(5a) において *Mary* は *herself* を非対称的に  $c$  統御しているが、(5b) では *Mary* は *herself* を  $c$  統御していない。よって束縛原理の  $c$  統御条件は (5a, b) の文法性を正しく予測できる。

一方、 $c$  統御条件には次のような反例もあることが知られている。

- (6) I talked to Thmug<sub>i</sub> about himself<sub>i</sub>. (Postal 1971: 36, 指標は筆者)  
 (7) a. \*I talked about himself<sub>i</sub> to Thmug<sub>i</sub>.  
 b. \*I talked to himself<sub>i</sub> about Thmug<sub>i</sub>.  
 c. \*I talked about Thmug<sub>i</sub> to himself<sub>i</sub>.

(6) において再帰代名詞 *himself* の先行詞 *Thmug* は、PP の中に含まれており、*himself* を  $c$  統御することができず、束縛原理 A に違反している

にもかかわらず、この文は文法的である。<sup>4</sup> これに対し、(7) の各文はいずれも非文である。C 統御条件のみではこれらの文の文法性を説明することができない。

### 3. Pollard and Sag (1992)

C 統御条件以外の方法で再帰代名詞と先行詞の構造的な関係を捉える試みの一つとして、Pollard and Sag (1992) がある。<sup>5</sup> 彼らは、c 統御条件の問題点を指摘し、代わる概念として relative obliqueness を用いることを提案する。彼らによれば再帰代名詞はその先行詞よりも高い obliqueness を持たなければならない。<sup>6</sup> Relative obliqueness には次のような階層が規定されている。

(8) SUBJECT < PRIMARY OBJECT < SECOND OBJECT < OTHER  
COMPLEMENTS

(Pollard and Sag 1992: 266)

(8) で右に行くほど obliqueness は高くなる。(8) に基づき、Pollard and Sag は束縛原理 A を次のように定義しなおしている。

(9) ある要素の項となっている再帰代名詞は、同じ要素の項の中に (8) において下位にある項が存在するならば、それと同一指標を振られなければならない。<sup>7</sup>

(9) は従来の束縛原理にとって問題となった (10) および (11) を説明できると主張されている。

(10) (= (6)) I talked to Thmug<sub>i</sub> about himself<sub>i</sub>.

(11) (= (7b, c))

a. \*I talked to himself<sub>i</sub> about Thmug<sub>i</sub>.

b. \*I talked about Thmug<sub>i</sub> to himself<sub>i</sub>.

(10) において先行詞 *Thmug* も再帰代名詞 *himself* も共に動詞 *talk* の項とみなされる。また、*Thmug* は *to*-PP に含まれており、一方 *himself* は *about*-PP に含まれている。Pollard and Sag によれば、*to*-PP は *about*-PP よりも obliqueness が低い。<sup>8</sup> (8) に即して書き表すと次のようになると考えられる。

(8') SUBJECT < PRIMARY OBJECT < SECOND OBJECT < ... < *to*-PP  
 < ... < *about*-PP < ...

よって *to*-PP 中の *Thmug* は *about*-PP 中の *himself* より obliqueness の階層において下位にあることになる。(10) において *himself* は obliqueness の低い *Thmug* と同一指標を振られているため、(10) は (9) を満たしており文法的となる。これに対し、(11a, b) では *Thmug* が *about*-PP、*himself* が *to*-PP に含まれているため、*Thmug* は *himself* の先行詞となることができないにも関わらず、*himself* が *Thmug* と同一指標を振られているため、非文法的となる。

このように、(9) は従来の c 統御条件にとって問題となった例を扱うことができるが、問題も残る。第一に、(9) のみでは次の例を説明することができない。

(12)(=(7a)) \*I talked about himself<sub>i</sub> to Thmug<sub>i</sub>.

(12) では (10) と全く同じように、先行詞 *Thmug* のほうが obliqueness の低い *to*-PP に含まれているにもかかわらず、(12) は非文法的である。

第二に、(9) によれば、再帰代名詞と同じ項構造の中に (8) の階層で下位にある項が存在するときのみ、それと再帰代名詞が同一指標を振られなければならない。したがって再帰代名詞が主語位置にあれば、再帰代名詞自体が (8) において最下位である SUBJECT ということになり、それより下位の項は存在し得ず、その場合は再帰代名詞は他のものと同一指標を振られ

る必要がない。このことは、再帰代名詞が主語位置に自由に生じられることを予測してしまう。しかし、言うまでもなくこれは事実ではない。

(13) \* Himself left. (ibid., 290)

(13) が示すように、再帰代名詞は主語位置に現れることはできない。このような例に対し、Pollard and Sag は語彙的な説明を行う。すなわち、再帰代名詞はその形態が示すように対格しか持たないため、主語位置や所有格の位置に現れることはできないという説明である。しかし、ここで形態論的な説明を持ち出すことは明らかに統一性に欠けると言わざるを得ない。

#### 4. Reinhart and Reuland (1993)

Reinhart and Reuland (1993) は、Pollard and Sag (1992) とは別の方法で束縛原理を規定しなおすことを試みる。彼らはまず、Pollard and Sag と同様に、項の位置にある再帰代名詞は同じ項構造の中にある項と同一指標を振られなければならないとする。彼らの定義によれば、項とは、述部（動詞など）によって  $\theta$  役割または格を与えられる投射である。<sup>9</sup> 英語の再帰代名詞は、述部の項のうちの二つを同定することによって、その述部を再帰化する機能を持つ。

Reinhart and Reuland による束縛原理の代案は、次のようにまとめられる<sup>10</sup>。

- (14) A: ある述部の項がすべて具現化されており、かつその項の一つが再帰代名詞であるならば、その再帰代名詞はその述部の他の項と同一指標を振られなければならない。
- B: ある述部の二つの項が同一指標をもつならば、そのうちの一つは再帰代名詞でなければならない。<sup>11</sup>

(14) の A は、項の位置にある再帰代名詞が局所的に束縛されなければならないことを説明できる。<sup>12</sup> しかし、(14) のみでは、従来の束縛原理にお

いて c 統御という概念でとらえられていた再帰代名詞と先行詞との構造的な関係を捉えることができない。よって、(14) のみでは (15a, b) の容認性の違いを説明することができない。

(15) (= (1))

- a. Mary<sub>i</sub> killed herself<sub>i</sub>.
- b. \*Herself<sub>i</sub> killed Mary<sub>i</sub>.

(15a, b) の両方において、再帰代名詞 *herself* は同じ項構造の中にある *Mary* と同一指標を振られており (14) を満たしているので、(14) のみでは (15a, b) の文法性の差を説明できない。このような問題を解決するため、Reinhart and Reuland は、(16) の連鎖条件を採用する。

(16) A maximal A-chain ( $\alpha_1, \dots, \alpha_n$ ) contains exactly one link –  $\alpha_1$  – that is both +R and Case-marked.

(Reinhart and Reuland 1993: 696)

+R とは、Reinhart and Reuland によれば Chomsky の束縛原理の枠組みにおいて指示表現の特性とされた R 特性 (referential independence) と同じものである。(ただし、Reinhart and Reuland は代名詞 (pronouns) も +R であるとしている。) すなわち (16) が要求することは、一つの連鎖はその先頭部にのみ +R 要素を持つことができまた持たなければならないということである。

(16) がどのように (15) を扱うかを見てみよう。Reinhart and Reuland によれば (15a, b) において *Mary* と *herself* は連鎖をなしている。(15b) においては先頭部ではなく尾部が +R を持つ NP となっており、連鎖の両端で連鎖条件に違反しており、非文法的となる。このように、従来の束縛原理で c 統御条件によって捉えられていた、再帰代名詞とその先行詞との構造的な関係を、Reinhart and Reuland は連鎖条件によって説明する。

次に、再帰代名詞と先行詞が前置詞句に含まれる例を Reinhart and

Reuland がどのように扱うかを見てみよう。

- (17) a. We talked with Lucie<sub>i</sub> about herself<sub>i</sub>.  
 b. \*We talked about Lucie<sub>i</sub> with herself<sub>i</sub>. (ibid., 715)

(17) および (6) や (7) からわかるように、再帰代名詞と先行詞が前置詞句に含まれる例においては、どの前置詞句に再帰代名詞が含まれるか、および前置詞句間の線形順序が文法性に影響する。(17) に対し、Reinhart and Reuland は次のような説明を試みる。まず彼らは、*with*-PP は動詞の項であるのに対し、*about*-PP は項ではなく付加詞であると仮定する。この仮定により、(17a) の *herself* は項の位置にはないことになり、同じ項構造の中で先行詞をもつという (9) の要求が適用されないことになる。これに対し、(17b) においては *herself* は *with*-PP の中にあるので、項であることになり、同じ項構造の中に先行詞をもたなければならないが、これは満たされていない。というのは、可能な先行詞である *Lucie* は *about*-PP の中にあり、かつ *about*-PP は項ではなく付加詞であると仮定されているからである。この *about*-PP が付加詞であるという仮定の根拠として、次のようなものが挙げられている。

- (18) We talked with Lucie<sub>i</sub> about her<sub>i</sub>.  
 (19) a. \*Can you talk with myself about Lucie?  
 b. Can you talk with Lucie about myself? (ibid., 715)

(18) が示すように *about*-PP には再帰代名詞だけではなく代名詞も生じることができる。<sup>13</sup> また Reinhart and Reuland は一人称の再帰代名詞 *myself* は付加詞の位置には自由に現われ得るとしているが、(19) において *myself* は *with*-PP の中には生じられないのに対し、*about*-PP の中には生じることができるとされる。これらの例から、Reinhart and Reuland は *with*-PP は項だが *about*-PP は付加詞であると結論する。

このように、Reinhart and Reuland は再帰代名詞と先行詞の構造的な



関係を連鎖条件および前置詞句間の区別によって扱っているが、これらには問題がある。この点は6節で扱う。

### 5. $\theta$ 役割の階層による規定

再帰代名詞と先行詞の構造的な関係を扱う方法として、 $\theta$  役割の階層によるアプローチがある。Jackendoff (1972)、Wilkins (1988) などはこの方法を採用している。Wilkins によれば再帰代名詞のもつ  $\theta$  役割は、次の (20) のような  $\theta$  役割の階層において先行詞のもつ  $\theta$  役割より低くなければならない。

$$(20) \text{ Agent} > \text{Patient} > \left. \begin{array}{l} \text{Affected} \\ \text{Location} \\ \text{Source} \\ \text{Goal} \end{array} \right\} > \text{Theme} \quad (\text{Wilkins 1988: 211})$$

(20) の階層における  $\theta$  役割のうち、Affected とは動詞が表わす動作によって影響を受ける要素がもつ  $\theta$  役割である。Affected をもつ項は、次の例が示すように受動態の主語となることができる。

- (21) a. John slept in New York.  
b. John slept in the bed.

- (22) a. \*New York was slept in.  
b. The bed was slept in. (ibid., 210)

ベッドは、眠るという動作から影響を受けるが、New York は影響を受けない。よって、(21b) の *the bed* は Affected という  $\theta$  役割をもつが、(21a) の *New York* は Affected をもたないとみなせる。また、(22) から、Affected をもつ項は疑似受動文の主語となれることがわかる。Wilkins によれば動詞の直後にくる前置詞句の目的語が Affected をもつ。このことは、次の例によって支持される。

- (23) a. Mary was talked to about Fred.  
 b. \*Mary was talked about Fred to.  
 c. Mary was talked about to Fred.  
 d. \*Mary was talked to Fred about. (ibid., 210)

$\theta$  役割の階層が(24)、(25)および(26)をどのように説明するか見てみよう。

(24) (= (1))

- a. Mary<sub>i</sub> killed herself<sub>i</sub>.  
       [Agent]            [Patient]  
 b. \*Herself<sub>i</sub> killed Mary<sub>i</sub>.  
       [Agent]            [Patient]

(25) (= (6))

- I talked to Thmug<sub>i</sub>            about himself<sub>i</sub>.  
                                   [Goal, Affected]            [Theme]

(26) (= (7))

- a. \*I talked about himself<sub>i</sub>            to Thmug<sub>i</sub>.  
                                   [Theme, Affected]            [Goal]  
 b. \*I talked to himself<sub>i</sub>            about Thmug<sub>i</sub>.  
                                   [Goal, Affected]            [Theme]  
 c. \*I talked about Thmug<sub>i</sub>            to himself<sub>i</sub>.  
                                   [Theme, Affected]            [Goal]

(24)-(26) の各文のうち、(24a) および (25) においては先行詞と再帰代名詞のそれぞれがもつ  $\theta$  役割は (20) の階層を満たしているが、(24b) および (26a-c) の各文は  $\theta$  役割の階層において再帰代名詞のもつ  $\theta$  役割が先行詞のもつ  $\theta$  役割よりも低くなっていない。よって  $\theta$  役割の階層を用いた分析はこれらの文の文法性を説明できる。<sup>14</sup>

## 6. Reinhart and Reuland (1993) と $\theta$ 役割の階層の比較

前節で述べたように、Wilkins (1988) などは再帰代名詞と先行詞の構造

的關係を捉えるために  $\theta$  役割の階層を使っている。これに対し、4節で述べた Reinhart and Reuland (1993) の議論では、再帰代名詞と先行詞の關係を捉えるのに  $\theta$  役割の階層は必要ないとしている。この節では、Reinhart and Reuland が  $\theta$  役割の階層を採用しないことについての根拠を考察し、その問題点を指摘する。

Reinhart and Reuland は (17a, b) の文法性を説明するため *with*-PP は項であるのに対し、*about*-PP は項ではないという仮定を行なった。この仮定の下に、束縛原理の代案 (14) および連鎖条件 (16) のみで (17a, b) を説明できると主張されていた。同様に、Reinhart and Reuland の分析で (25) および (26) を説明するためには、*to*-PP は項であるが *about*-PP は項ではないという仮定がなされると考えられる。3節で述べたように、このような仮定の根拠として挙げられていたのは (27) および (28) であった。

(27) (= (18)) We talked with Lucie<sub>i</sub> about her<sub>i</sub>.

(28) (= (19))

- a. \*Can you talk with myself about Lucie?
- b. Can you talk with Lucie about myself?

第一に、(27) のように *about*-PP には代名詞も生じることができる。第二に、付加詞の位置には自由に現われ得る一人称の再帰代名詞 *myself* が、(28) の *about*-PP の中には生じることができる。以上の二点から、Reinhart and Reuland は、*with*-PP は項だが *about*-PP は付加詞であると結論した。しかし、これらの文の文法性には問題がある。Wescoat (personal communication) によれば、(27) が文法的となるのは *her* がストレスを伴う場合のみであり、(28b) も完全に文法的な文とはいえない。もし Reinhart and Reuland が主張するように *about*-PP が項でなく付加詞であるならば、(27) も (28b) も完全に文法的な文となるはずである。

また、次のような文も問題となる。

- (29) So many outrageous claims were made about himself<sub>i</sub> by the speaker<sub>i</sub>, that the crowd began to heckle.

(Wescoat 1988: 11)

- (30) a. ??So many outrageous claims were made about the speaker by myself, that the crowd began to heckle.  
 b. ??So many outrageous claims were made about myself by the speaker, that the crowd began to heckle.

(29) は完全に容認される文なので、Reinhart and Reuland の説明に従えば、*about*-PP は項ではないが *by*-PP は項であると仮定することになる。(もしこの仮定がなければ、(himself, the speaker) という連鎖が形成され、その先頭部ではなく尾部が+R をもっているので、(1b) と同じように連鎖条件によって排除されてしまう。) (29) で *about*-PP は項ではないが *by*-PP は項であると仮定するためには、(17) の場合と同じように、*about*-PP 中には一人称の再帰代名詞 *myself* が生じられるが *by*-PP 中には *myself* は生じられないことが必要になる。しかし、(30a, b) が示すように、*myself* が *about*-PP 中に生じやすいという事実はない。よって、(29) を  $\theta$  役割の階層なしに説明するための Reinhart and Reuland の仮定は十分な根拠がないことになる。

このように、再帰代名詞と先行詞が共に PP 中にある例を  $\theta$  役割の階層なしで説明しようとする、余分の仮定が必要となり、しかもその仮定には十分な根拠がない。一方、前節で述べたように  $\theta$  役割の階層を使うなら、このような例を統一的に説明できる。したがって、 $\theta$  役割の階層の利点を考えるならば、 $\theta$  役割の階層は不要であるという Reinhart and Reuland の主張は、適切ではないと思われる。<sup>15</sup>

## 7. 結 語

小論では、再帰代名詞と先行詞の構造的関係に関わる問題を考察し、c 統御条件の代案となる幾つかの提案を比較した。束縛原理における c 統御条

件のみでは、特に再帰代名詞・先行詞の両方が PP に含まれている例を扱う際問題が生じる。小論ではこのような例に関し、c 統御条件の代案のそれぞれがどのような説明を行なうかを比較し、 $\theta$  役割の階層を使った規定が最も効果的であることを示した。

## 注

- 1 ここで c 統御概念を全く捨て去ることを主張するのではないという点に注意されたい。小論の目的は、c 統御概念の代案同士を比較し、その中で  $\theta$  役割の階層を使ったアプローチの優位性を主張することである。(注14も参照。)
- 2 Chomsky (1986a) 参照。
- 3 以下、この条件を「c 統御条件」と呼ぶ。
- 4 (6)のような構造において、先行詞が再帰代名詞を c 統御するようにするため、V-P 再分析という方法があるが、この分析には問題がある。詳しくは、Todoroki (1995) を参照されたい。
- 5 Pollard and Sag の議論は再帰代名詞を含む照応形全体に及んでいるが、ここでは議論を再帰代名詞のみに限る。
- 6 Pollard and Sag は、束縛原理に従うのは項である再帰代名詞のみであるとしている。
- 7 以下では、同じ要素の項となっているもの同士を「同じ項構造の中にある」という。
- 8 Pollard and Sag (1992: 266) 参照。
- 9 項の定義に格を与えられている投射も含めることによって、いわゆる例外的格標示構文を扱うことが可能になる。
- 10 厳密な定義に関しては、Reinhart and Reuland (1993: 678) を参照されたい。
- 11 このことは、項でない位置(付加詞の位置)では再帰代名詞と代名詞は相補分布をなさず、両方出現可能となることを予測する。
- 12 すなわち、(2) の束縛原理の完全機能複合という概念と類似した効果をもたらす。
- 13 注11 参照。
- 14 (24)のように再帰代名詞が動詞の目的語位置に現われる場合においては、 $\theta$  役割の階層による分析にとって問題となる例がある。(例外的格標示構文など) Todoroki (1995) では、再帰代名詞が動詞の目的語位置に現われる場合は c 統御による説明のほうが勝っていると、 $\theta$  役割の階層による分析と c 統御条件との統合を試みているので、詳しくはそちらを参照されたい。
- 15 Reinhart and Reuland は束縛条件に  $\theta$  役割の階層を取り込むことは、必要であるのみならず間違いであるとしている。その根拠として、オランダ語の例が挙げられている。しかし、英語の再帰代名詞とオランダ語の再帰代名詞が完全

に対応しているわけではないと仮定すれば、オランダ語の例を理由にして英語における  $\theta$  役割の階層を完全に捨て去る必要はない。

### References

- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht.
- Chomsky, Noam (1986a) *Barriers*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (1986b) *Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use*, Praeger, New York.
- Jackendoff, Ray (1972) *Semantic Interpretation in Generative Grammar*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Pollard, Carl and Ivan A. Sag (1992) "Anaphors in English and the Scope of Binding Theory," *Linguistic Inquiry* 23, 261-303.
- Postal, Paul M. (1971) *Cross-Over Phenomena*, Holt, Rinehart, and Winston, New York.
- Reinhart, Tanya and Eric Reuland (1993) "Reflexivity," *Linguistic Inquiry* 24, 657-720.
- Todoroki, Rika (1995) "Constraints on Reflexives: Where Syntax and Semantics Meet," *Osaka University Papers in English Linguistics*, Volume II.
- Wescoat, Michael T. (1988) *A Consideration of Some Constraints on Anaphora*, MS., Stanford University, Stanford, CA.
- Wilkins, Wendy (1988) "Thematic Structure and Reflexivization," *Syntax and Semantics* 21, ed. by Wendy Wilkins, 191-213, Academic Press, New York.